

平成 28 年の漁況

向井哲也・森脇和也・金元保之

1. まき網漁業

(1) 漁獲量の経年変化

図1に1960年（昭和35年）以降の島根県の中型まき網漁業による魚種別の漁獲量の経年変化を示した。

2016年の総漁獲量は約7万7千トンで、前年（2015年、以下同様）比92%、平年（2011年～2015年の5ヶ年平均、以下同様）比85%であった。一方、CPUE（1統1航海当り漁獲量）は41.6トンで、前年並みで平年を下回った（前年比89%、平年比85%）。2003年以降、長期的にみるとCPUEは増加傾向にある。なお、2016年の漁労体数は12ヶ統（県西部4ヶ統、県東部8ヶ統）であった。

本県のまき網漁業の漁獲の主体は、1970年代後半～1990年代前半のマイワシから、1990年代後半にマアジに変遷し、近年は同種が漁獲を支える構造にあった。ところが、2011年にマイワシの漁獲割合が急増し、以後マアジとともに漁獲を支える主要魚種となっている。魚種別の動向をみると、サバ類（総漁獲31%）は前年を上回り、マアジ（同25%）は前年並み、マイワシ（同23%）、ウルメイワシ（同3%）、カタクチワシ（同4%）は前年を下回る漁況であった。

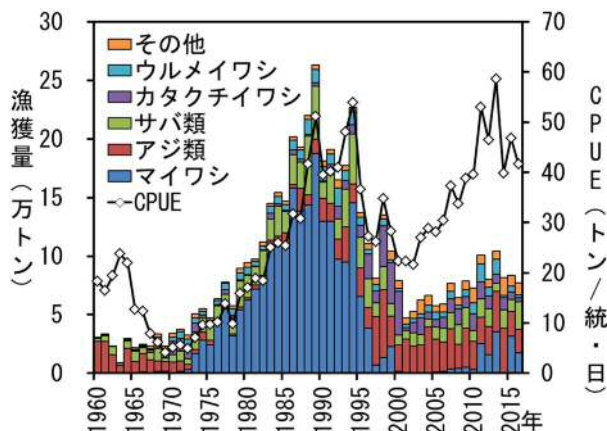


図1 島根県の中型まき網漁業による魚種別漁獲量とCPUEの推移(2002年までは農林水産統計値、2003年以降は島根県漁獲統計システムによる集計値)

(2) 魚種別漁獲状況

図2～6に島根県の中型まき網漁業による魚種別月別漁獲動向のグラフを示した。

① マアジ

2016年の漁獲量は約2万トンで、前年並みで平年を下回った（前年比95%、平年比72%）。漁獲の主体は2歳魚（2014年生まれ）で、夏季以降は0歳魚（2016年生まれ）も漁獲に加入した。山陰沖ではマアジは春から初夏にかけてまとまった漁獲があることが多く、4月～7月の漁獲量は約8千トンで前年・平年並みの漁況であった（前年比106%、平年比107%）。特に4月はまとまった漁獲があった。一方、秋季（9月～11月）の漁獲量は約7千トンで不調であった前年を上回ったが、平年は下回る漁況であった（前年比195%、平年比63%）。

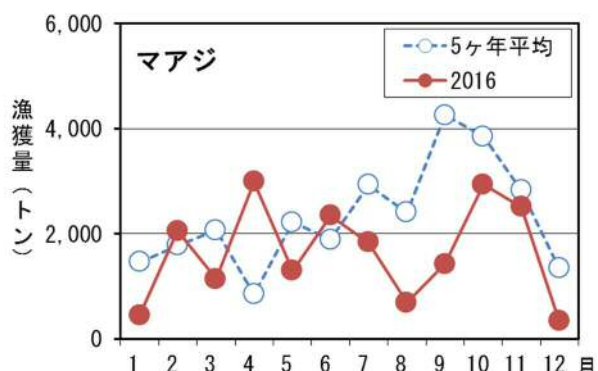


図2 中型まき網漁業によるマアジの漁獲

② サバ類

2016年の漁獲量は約2万3千トンで、前年・平年を上回った（前年比224%、平年比183%）。山陰沖ではサバ類の漁獲は例年、秋季～翌春が好調であり、4月～9月にかけては低調となる。本年の冬季（1～3月）の漁獲は約1万1千トンで前年・平年を上回る漁況であった（前年比229%、平年比196%）。また、秋季（10～12月）の漁獲も約8千トンで前年・平年を上回った（前年比278%、平年比164%）。漁獲の主体は、冬

季がマサバ1歳魚（2015年生まれ）、夏季以降はマサバ0歳魚（2016年生まれ）であった。

③ マイワシ

2016年のマイワシの漁獲量は約1万8千トンで、前年・平年を下回った（前年比56%、平年比81%）。月別の漁獲動向をみると、県東部を主漁場として4月～6月と9月～12月にかけて漁獲がまとまり、5月には8千トンを超える漁獲があった。

山陰沖のマイワシ資源は2000年以降低水準期が続いていたが、2011年（漁獲量約2万5千トン）から漁獲が急増した。2012年以降も2014年（同850トン）を除き、約1万5千トン～3万5千トンの漁獲が続いており、マイワシ資源は回復傾向にあると考えられるが、2014年のように漁獲がまとまらない年もあり、今後も動向を注視する必要がある。

④ カタクチイワシ

2016年のカタクチイワシの漁獲量は約3千トンで、前年・平年を下回った（前年比53%、平年比34%）。月別の漁獲動向をみると、漁獲は8～11月に集中し、春季はほぼ皆無であった。近年カタクチイワシの漁獲盛期は春季（3月～5月）又は秋季（9月～11月）のどちらかになる年が多いが、2016年は秋季のパターンであった。

⑤ ウルメイワシ

2016年のウルメイワシの漁獲量は約2千トンで、前年・平年を下回った（前年比51%、平年比29%）。月別の漁獲動向をみると、年間を通して低調であったが、10月～11月に約1300トンの漁獲があり、近年のウルメイワシの漁獲パターンと同様に秋季が漁獲盛期であった。

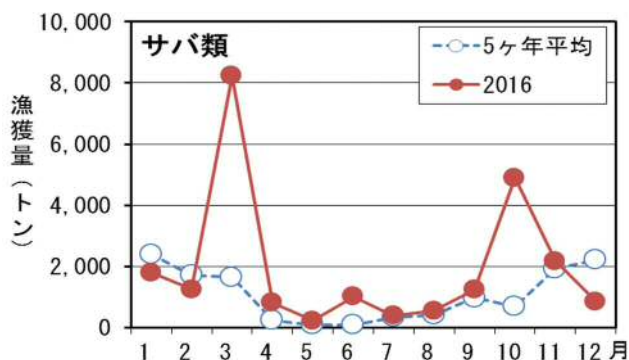


図3 中型まき網漁業によるサバ類の漁獲量

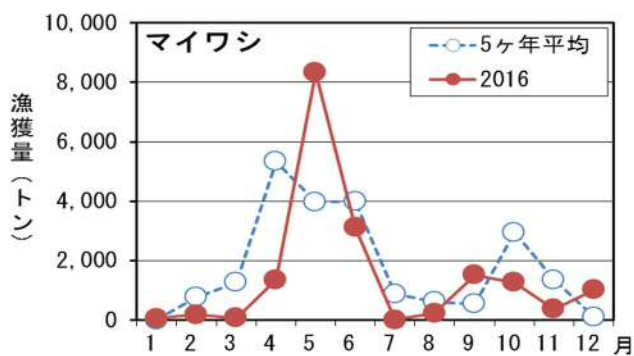


図4 中型まき網漁業によるマイワシの漁獲量

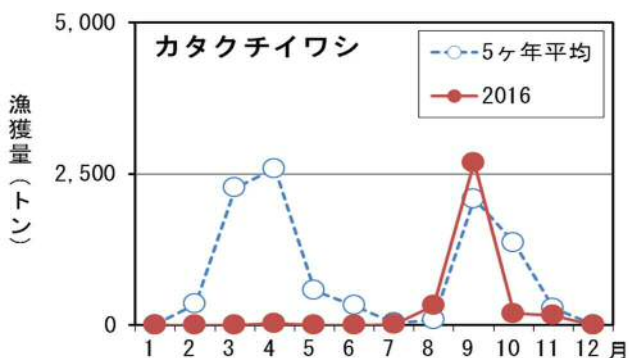


図5 中型まき網漁業によるカタクチイワシの漁獲量

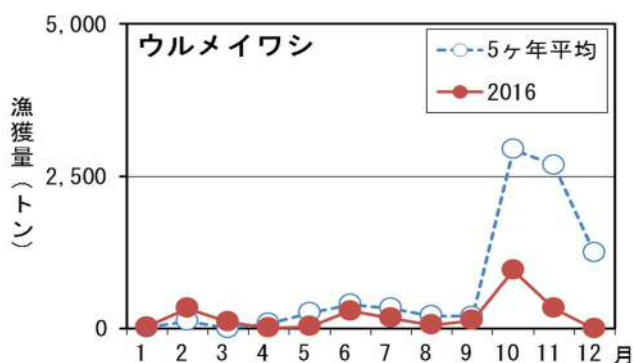


図6 中型まき網漁業によるウルメイワシの漁獲量

2. いか釣り漁業

ここでは、県内外のいか釣り漁船が水揚げするいか釣り漁業の代表港である浜田漁港（島根県浜田市）に水揚げされた主要イカ類（スルメイカ、ケンサキイカ）の漁獲動向をとりまとめた。対象とした漁業は、いか釣り漁業（5トン未満船）、小型いか釣り漁業（5トン以上30トン未満船）および中型いか釣り漁業（30トン以上）である。

（1）スルメイカ

浜田漁港に水揚げされたスルメイカの2011年以降の水揚量および水揚金額、単価の経年変化を図7と図8に示した。

2016年の漁獲量は472トンで、前年（744トン）を下回り、平年（448トン）を上回った（前年比63%、平年比105%）。水揚金額は約2億1千万円（前年比113%、平年比181%）であった。キログラムあたりの平均単価は468円で、平年（325円）の1.4倍であった。

スルメイカの月別の水揚動向を図9に示した。島根県沖では、例年、冬季～3月は冬季発生系群の産卵南下群が、3月～初夏は秋季発生系群の索餌北上群が漁獲対象となる。2016年は秋季発生系群主体の漁獲は低調であったが、冬季発生系群主体の漁獲は3月をピークに好調に推移したため、1月～4月の漁獲量は440トンで平年（365トン）を上回った（平年比121%）。近年は両系群の資源状態が不良※であり、今後も漁獲が低調に推移すると推察される。

※水産庁による平成28年度のスルメイカの資源評価では、冬季発生系群の資源水準は「低位」、動向は「減少」、秋季発生系群の資源水準は「中位」、動向は「減少」とされている。

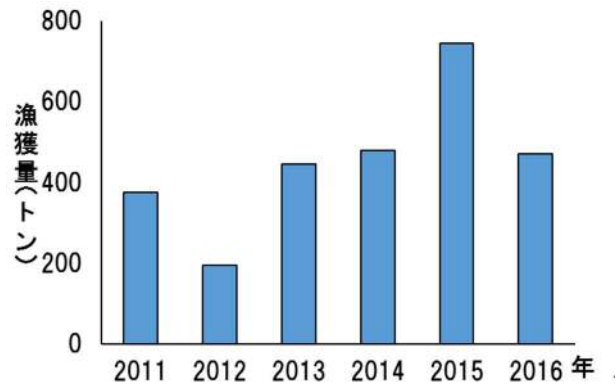


図7 浜田漁港におけるスルメイカの水揚量の経年変化

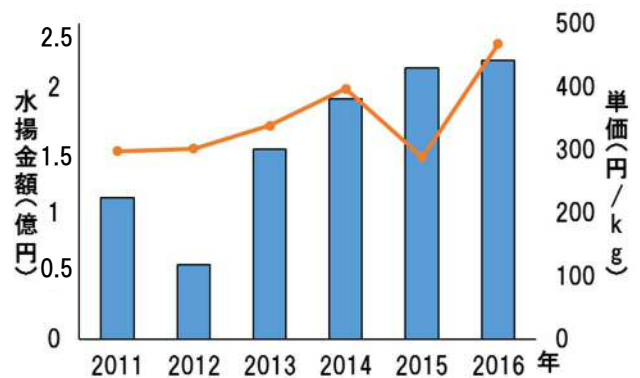


図8 浜田漁港に水揚げされたスルメイカの水揚金額と単価の経年変化

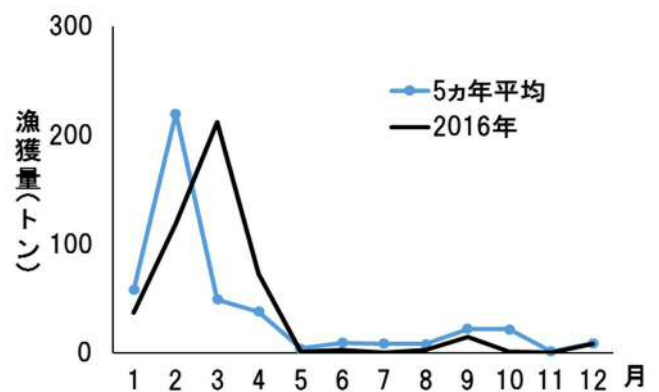


図9 浜田漁港におけるスルメイカの月別水揚動向

（2）ケンサキイカ

浜田漁港に水揚げされたケンサキイカの2011年以降の水揚量および水揚金額、単価の経年変化を図10と図11に示した。

2016年のケンサキイカの漁獲量は267トン

で、前年（455 トン）・平年（609 トン）を下回った（前年比 59%、平年比 44%）。水揚金額は約 2 億 7 千万円で、前年比 61%、平年比 57%であった。キログラムあたりの平均単価は 1,006 円で、平年（864 円）の 1.2 倍程度であった。

ケンサキイカの月別の水揚動向を図 12 に示した。2016 年のケンサキイカ漁は 6 月中旬から水揚量が増え始め、ケンサキイカ型が主体となる春夏来遊群（5 月～8 月）の漁獲量は平年を下回る 55 トン（平年比 62%）、ブドウイカ型が主体となる秋季来遊群（9 月～12 月）も平年を下回る 212 トン（平年比 55%）であった。2006 年以降、春夏来遊群の漁況が不調である一方、秋季来遊群の漁況は好調である傾向が続いていた。しかしながら、秋季来遊群の漁獲量は、2011 年（1,095 トン）をピークに減少傾向にあり、今後の資源動向を注視する必要がある。

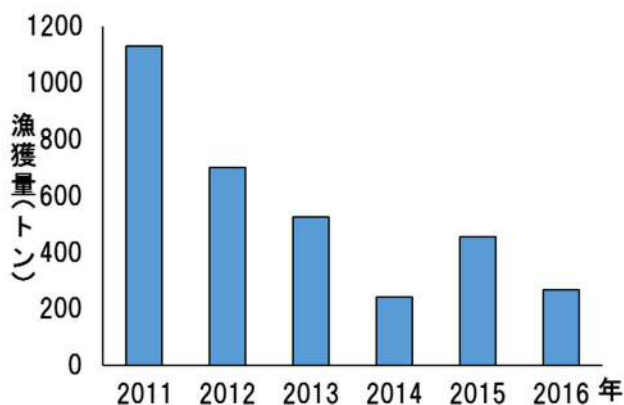


図 10 浜田漁港におけるケンサキイカの水揚量の経年変化

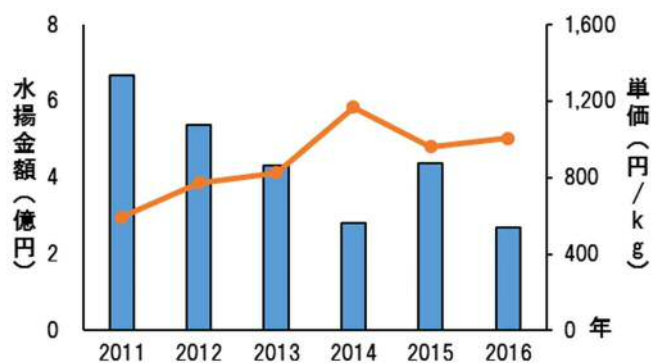


図 11 浜田漁港に水揚げされたケンサキイカの水揚金額と単価の経年変化

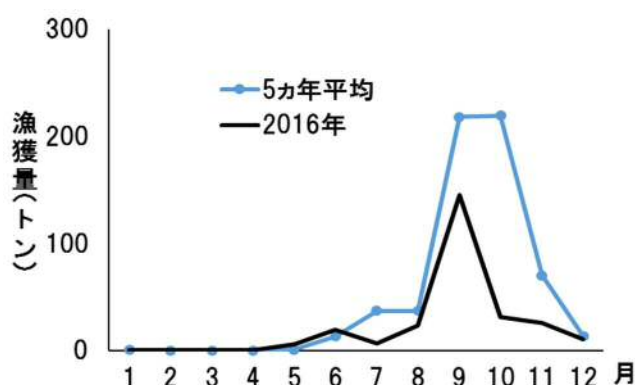


図 12 浜田漁港におけるケンサキイカの月別水揚動向

3. 沖合底びき網漁業（2 そうびき）

本県では現在7統が操業を行っている。本報告では、このうち浜田港を基地とする5統を対象に取りまとめを行った。ここでは統計上、漁期年を用い、1漁期を8月16日から翌年5月31日までとした（6月1日～8月15日までは禁漁期間）。

(1) 全体の漁獲動向（図13）

浜田港を基地とする沖合底びき網漁業（操業統数5ヶ統）の2016年漁期（2016年8月16日～2017年5月31日）の総漁獲量は3,108トン、総水揚金額は17億163万円であった。また、1統当たりの漁獲量は636トン、水揚金額は3億4,033万円、漁獲量は平年並みで水揚げ金額は平年を上回った（過去10年平均：620ト、2億9,610万円）。

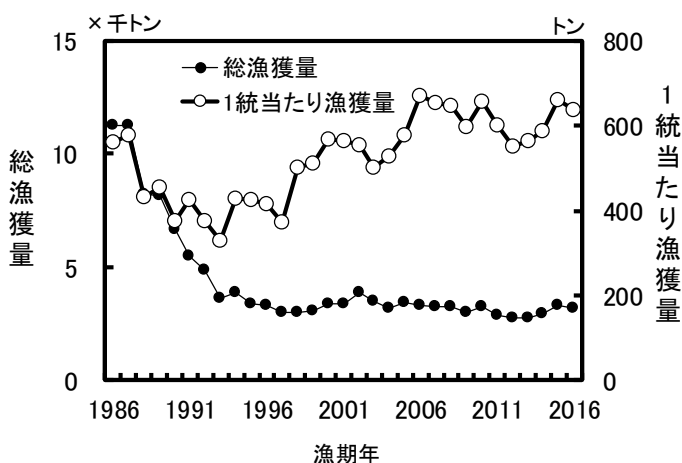


図13 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業における総漁獲量と1統当たり漁獲量の経年変化

(2) 主要魚種の漁獲動向（図14）

① カレイ類

ムシガレイのCPUEは47トンで平年の6割、ソウハチのCPUEは35トンで平年の8割、ヤナギムシガレイのCPUEは10トンで平年の6割の水揚げに留まった。

② イカ類

ケンサキイカのCPUEは35トンで平年の9割、ヤリイカのCPUEは10トンで平年の1.3倍の水揚げとなった。

③ その他の魚類

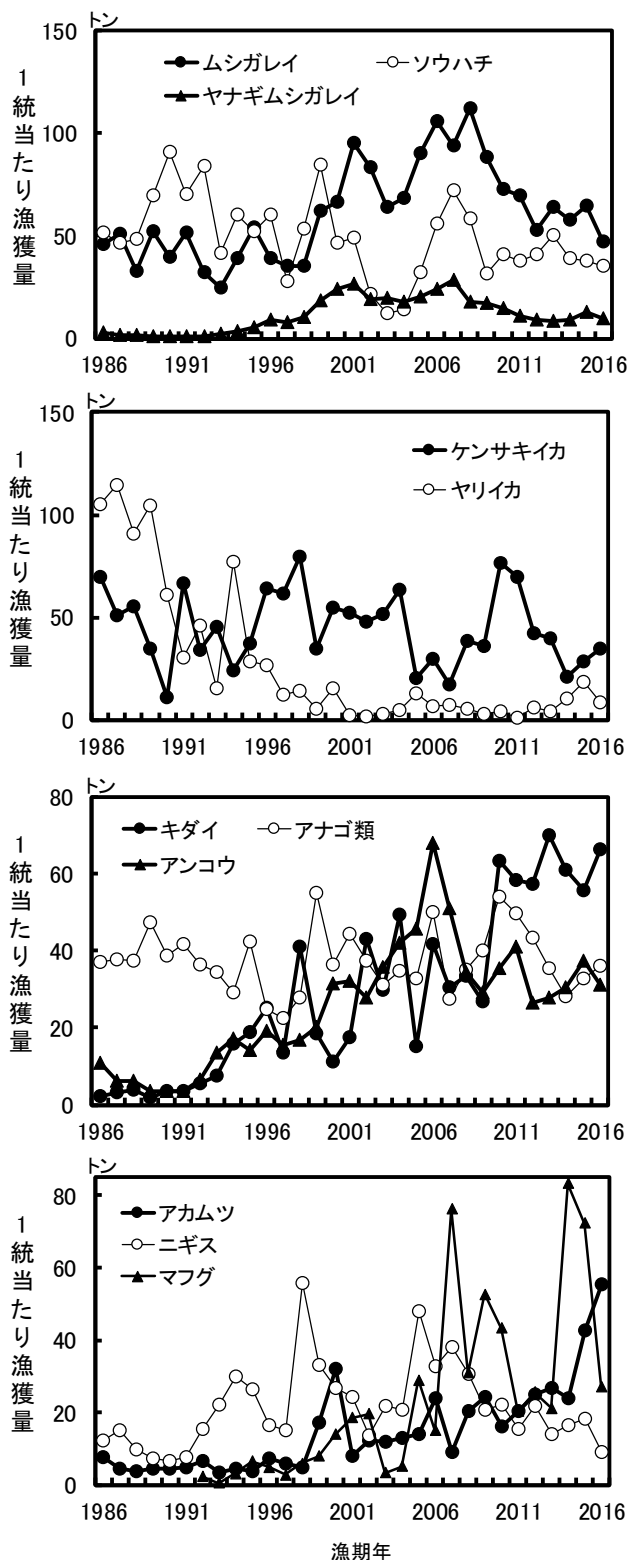


図14 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業における主要魚種の1統当たり漁獲量の経年変化

アナゴ類のCPUEは36トンで平年の9割、ニギスのCPUEは9トンで平年の4割の水揚げに留まった。また、アンコウのCPUEは31

トンで平年の8割の水揚げとなった。

アカムツのCPUEは55トンで、平年の8割の水揚げとなった。

また、マフグのCPUEは27トンで、平年の6割の水揚げに留まった。キダイのCPUEは66トンで、平年の1.3倍の水揚げとなった。

この他、カワハギ類のCPUEは61トンで平年の4.4倍、マトウダイのCPUEは12トンで平年の9割の水揚げとなった。

4. 小型底びき網漁業第1種（かけまわし）

小型底びき網漁業1種（以下、小底という）は山口県との県境から隠岐海峡にかけての水深100～200mの海域を漁場とし、現在43隻が操業を行なっている。ここでは統計上、漁期年を用い、1漁期を9月1日から翌年5月31日までとした（6月1日～8月31日までは禁漁期間）。なお、1隻はずわいがに漁業との兼業船で漁期を通して操業を行わないことから、これを除いた42隻分の集計とした。

（1）全体の漁獲動向（図15）

2016年漁期（平成28年9月1日～平成29年5月31日）の総漁獲量は3,812トン、総水揚げ金額は18億5,662万円であった。1隻当たり漁獲量（以下、CPUE）は91.2トン、水揚げ金額は4,444万円で、漁獲量では平年比を13%下回ったが、水揚げ金額では平年を10%上回った（過去10ヶ年平均；104.9トン、4,024万円）。

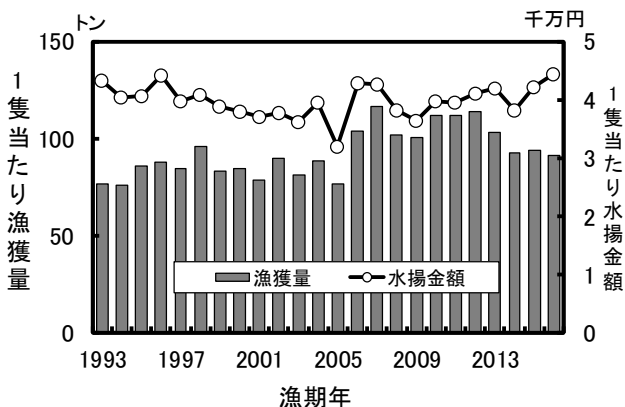


図15 小型底びき網漁業における1隻当たり漁獲量と水揚げ金額の経年変化

（2）主要魚種の漁獲動向（図16）

① カレイ類

ソウハチのCPUEは15.8トンで、前年の1.1倍で平年の7割の水揚げとなった。一

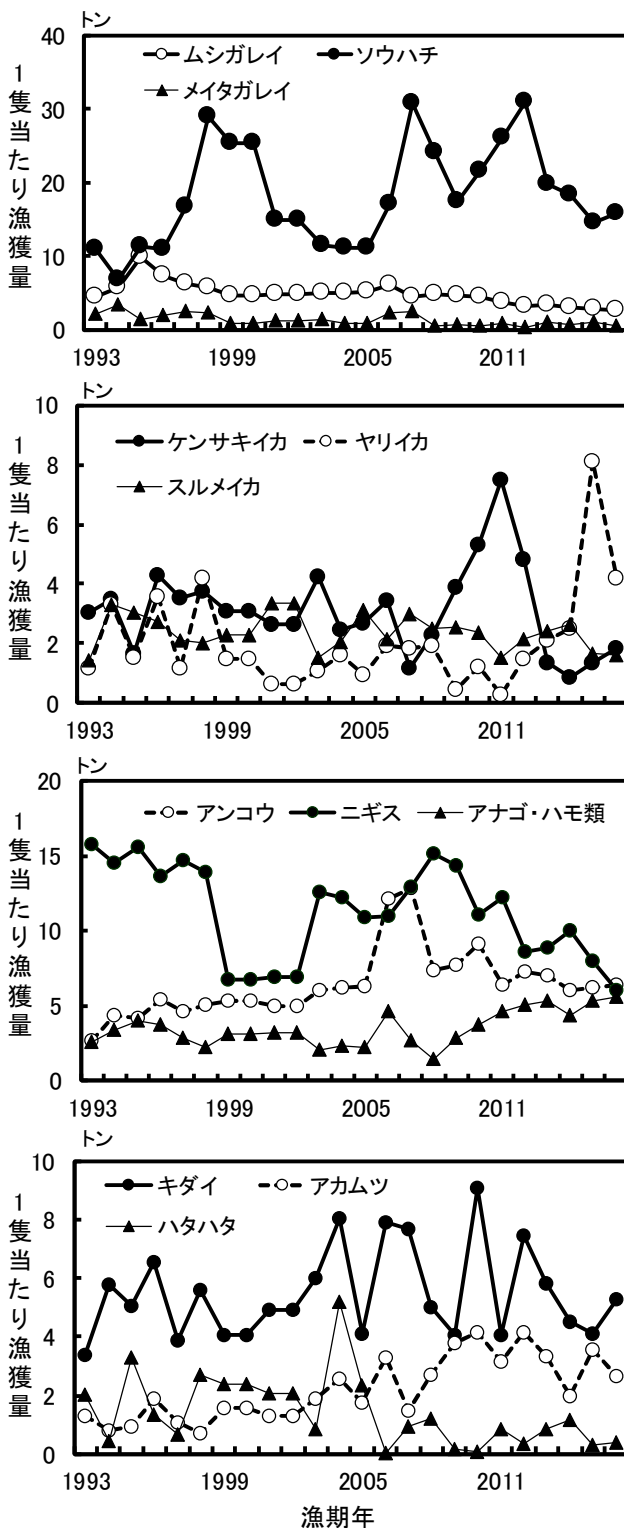


図16 小型底びき網漁業における主要魚種の1隻当たり漁獲量の経年変化

方、ムシガレイの CPUE は 2.6 トンで前年並で平年の 7 割の水揚げに留まった。このほか、ヤナギムシガレイの CPUE は 1.7 トン（平年の 1.1 倍）、メイタガレイの CPUE は 0.5 トン（平年の 5 割）であった。

② イカ類

ケンサキイカの CPUE は 1.8 トンで、前年並で平年の 6 割の水揚げに留まった。ヤリイカの CPUE は 4.2 トンで、前年の 5 割で平年の 1.9 倍の水揚げであった。

③ その他の魚類

アカムツの CPUE は 2.6 トンで、前年の 7 割、平年の 8 割となった。キダイの CPUE は 5.3 トンで平年の 9 割となった。ニギスの CPUE は 6.0 トンで平年の 5 割、アンコウの CPUE は 6.4 トンで平年の 8 割の水揚げに留まった。アナゴ類は 5.6 トンで、平年の 1.4 倍の水揚げであった。

5. ばいかご漁業（2015 年・2016 年）

石見海域におけるばいかご漁業は小型底びき網漁業（第 1 種）休漁中の 6～8 月に、本県沖合の水深 200m 前後で行われ、2015 年は 4 隻、2016 年は 3 隻が操業を行った。

解析に用いた資料は、当センター漁獲管理情報処理システムによる漁獲統計と各漁業者に記帳を依頼している標本船野帳である。これらの資料をもとに、漁獲動向、漁場利用ならびにエッチュウバイの価格動向について検討を行った。また、資源生態調査として、JF しまね大田支所ならびに仁摩支所に水揚げされた漁獲物の殻高を銘柄別に測定し、銘柄別漁獲量から本種の殻高組成を推定した。

（1）漁獲動向

ばいかご漁業における総漁獲量・総水揚金額は 2015 年は 82.7 トン・4,712 万円で、2016 年は 79.8 トン・4,367 万円であった。また、1 隻当たりの漁獲量は 2015 年は 21.6 トン・1,059 万円で、2016 年は 26.6 トン・1,456 万円であった。1 隻あたり漁獲量・金額は増加傾向にあり、2016 年では平年（過去 10 年平均）比で漁獲量が 138%、水揚金額が 169%であっ

た。

図 17 にエッチュウバイの 1 隻当たり漁獲量と水揚金額の推移を示す。1 隻当たりの漁獲量・金額は 2015 年は 17.5 トン・983 万円で、2016 年は 21.7 トン・1,210 万円であった。2016 年の平年比は漁獲量が 136%、水揚金額が 178%であった。

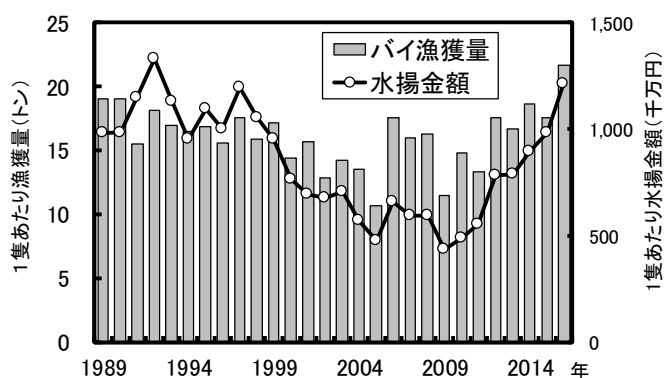


図 17 ばいかご漁業におけるエッチュウバイの 1 隻当たり漁獲量と水揚金額の推移

漁獲されたエッチュウバイの殻高組成については、2015 年は殻高 90～100mm 台にピークが見られたが、2016 年はこれまでに比べ殻高 40～60mm の小型貝が多い組成となった。

参考文献

- 1) 村山達朗・由木雄一：島根県水産試験場事業報告書（平成 4 年度），64-69（1991）